

## IAU 特別総会報告

古 在 由 秀\*

1973年9月4日から12日にかけて、ポーランドで国際天文連合 (IAU) の特別総会 (Extraordinary General Assembly) がひらかれ、世界各国から800名ばかりの人達がこれに参加した。日本からは、広瀬秀雄、宮本正太郎、杉本太一郎、佐藤文隆氏など10名ばかりが出席した。

この特別総会はコペルニクスの生誕500年を記念してひらかれたもので、1973年中ポーランドでひらかれたコペルニクス記念の諸行事の一つである。

第1日目の9月4日には、ワルシャワ市の中央にそびえる「文化と科学の宮殿」中の大講堂で記念式典が行なわれたが、これがポーランドでの唯一の全体集会で、あとは6つのシンポジウムがワルシャワ、トルン、クラコウの3つの都市で行なわれた。

ワルシャワでは「太陽系と小さい恒星系の安定性」、「重力放射と重力崩壊」、「恒星進化の晩期」の3つのシンポジウムが、クラコウでは「宇宙論と観測データのふれあい」、トルンでは「惑星系の探索」、「コペルニクスの天文学とその背景」のシンポジウムがひらかれた。

「コペルニクスの天文学とその背景」のシンポジウムは科学史学会との共催で、これにひきつづきコペルニクス・コロキウムがあり、こちらには荒木俊馬・中山茂氏などが出席した。

なお、G.B. フィールドの「恒星間物質の物理学」、F. J. ロウの「赤外線天文学」、V.A. アムバルツミアンの「銀河系の核」という特別講演がそれぞれ、ワルシャワ、トルン、クラコウで行なわれた。

筆者は IUTAM (International Union of Theoretical and Applied Mechanics) との共催の「太陽系と小さい恒星系」のシンポジウムの責任者になっていたので、2年も前から各方面と連絡し、7月はじめにはプログラムを決定して現地の組織委員会に送っておいたので、シンポジウムは問題なく運営されると安心し、9月3日夜にはワルシャワに着くつもりにしておいた。ワルシャワにはモスクワで飛行機を乗り換えて行くことにしておいたのだが、東京—モスクワのソ連航空が4時間もおくれてしまったので、予定していたワルシャワ行きの飛行機にのりそこなってしまい、記念式典のはじまる4日の朝8時

半にやっとワルシャワに到着した。

9時半にホテルに着くと、入口で IAU の総幹事となったコンテパウロスと出会い、会場への道をきき、10時にははじまる式にはやっとの思いで間にあった。会場に入ると、待ちかまえていた何人かの人達にとりかこまれ、追加講演をさせると話し込まれるはめになった。その人達にいわせると、講演を予定している何人かのソ連の人は来ないので、講演の時間はあるはずだというのである。ソ連の人達にきいてみても、たしかにレニングラードのチェボタレフ、ブルンベルグ、アゲキアンなどは来ないという。というわけで、せっかく苦勞してこしらえた、シンポジウムのプログラムはかなりつくり直さなければならなくなり、多忙な4日のシンポジウムはあわただしいうちにはじまった。

シンポジウムで発表された論文のうち、太陽系をあっかつたものがほぼ3分の2、恒星系関係がのこりの3分の1であったが、もっと一般的なモーザの「天体力学における安定性の問題」、ボラードの「 $n$  体問題について」という一般的な話題についても総合報告をしてもらった。

8日の土曜日の午前でこのシンポジウムを終り、午後からはワルシャワ近郊のショパンの生家を訪れたりして、9日の日曜日は、バス4台つらねて、ワルシャワから南200kmあまりのクラコウ市に向った。途中二ヶ所ほどでバスを降り、古い城などを見学させてもらった。

クラコウでのシンポジウムは大学の物理学教室の大講堂で行なわれたが、「宇宙論と観測データのふれあい」のシンポジウムには300人以上の人が参加し、とくに物理学者が沢山いたのが目立った。最終日の11日は午後から一人で飛行機にのってワルシャワにもどり、IAUのお別れの夕食会に出席した。

12日で IAU の行事は終ったが、13日の朝、トルンのコペルニウス大学のゴンスカ教授の車にのってトルン市に向った。トルンはワルシャワの北西200kmあまりのところにあるが、この間の道は高低のほとんどない平らなところを走り、ポーランドが農業国であることをあらためて知ったが、ここでも農業に従事しているのは老人が多いようだった。

コペルニクス大学には天体力学を専攻する数人のグループがいるが、この人達と丸一日話をし、15日に汽車でワルシャワにかえり、筆者のポーランド訪問は終った。

\* 東京天文台  
Report of IAU Extraordinary General Assembly in  
Poland